

東京都現代俳句協会会報

発行人 今野 龍二
発行所 東京都現代俳句協会
〒113-0033 文京区本郷5-3-2-302
長谷川はるか
TEL-FAX 03-3814-1228

歌を忘れたカナリヤ

都区協幹事長 今野 龍二

古今東西詩歌の原点は恋、恋の詩である。
我が国でも万葉集に始まる恋の歌の賦系を
辿ってみよう。

あかねさす紫野ゆき標野ゆき

野守はみずやきみが袖ふる

額田王

万葉集の実に六割が恋の詩。定家による百
人一首には各家集より四十八首の恋の部が載
せられている。

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば

忍ぶることの弱りもぞする

式子内親王

百人一首中屈指の恋の詩とされる「新古今・恋
二 式子内親王の恋の相手は定家とも西行と
も言われているが両方かもしれぬ。そもそも
古来日本には不倫などと概念は存在してい
なかつたのだから。

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしちに

衣かたしきひとりかも寝む

藤原良経（新古今・秋）

契りおきしさせもが露を命にて

あはれ今年の秋もいぬめり

藤原基俊（千載・雑）

二首とも恋の歌とも読めるがそれぞれ秋の
部、雑の部。後者はあれほどかく約束した
のにそれも果たせぬまま今年の秋も過ぎ去っ

てしまうのですね。としか読めないが和歌に
は詞書という厄介なものがあり歌の真相はわ
いろを贈って息子の昇進を約束したのに未だ
に約束は果たされないままですね、という恨
みつらみの一首。

近世においては注目すべき歌人はいなく
なつてしまふが。近代では与謝野晶子、現代
では俵万智が特筆される恋の歌人であろう。
このように詩歌は恋を詠つてこそ秀歌が生ま
れるもの。短詩系の代表である俳句はどうし
たのだろうか。恋の俳人などはほとんどない。
尤も金子兜太に恋の歌などと想像すると気味
が悪い。

羅や人悲しむ恋をして

鈴木真砂女

見られつつ使ふ紅筆をこの花

遠山 陽子

だまされてゐるやも知れぬ髪洗ふ

三田きえ子

不倫の歌も俳句の歴史に残る。齢を気にし
てはならない、おおらかに恋の歌を謳おう。歌を
忘れたカナリヤは後ろの山に捨ててはならない。

春の吟行会報告

神楽坂周辺吟行・通信句会

令和五年六月十四日実施

春の吟行は、五月に創立四十周年記念俳句大会が開催されたため、時期を後にずらして実施することになりました。既に梅雨の季節で、当日は朝から雨模様。集合場所の地下鉄神楽坂駅で待ち合わせしていた時には、一時的にかなり強い雨が降りました。しかし幸いにも出発間際には小降りに収まりました。

まずは駅から直ぐ近くにある赤城神社へ。高台にある神社は地域一帯の鎮守として信仰されています。モダンな社殿は隈研吾による設計とのこと。奉納されている絵馬には芸能人関係のものも見受けられました。神社を発つて、神楽坂通りとは異なるルートをとリ、途中、白銀公園の横を進みます。そこはイソップ物語の翻訳で知られる旧幕臣、渡辺温の邸宅跡です。そして平安時代の創設が伝えられる筑土八幡神社へ。社内には奉納された猿の庚申塔などのほか、童

謡「金太郎」を作曲した田村虎蔵の顕彰碑がありました。神社の直ぐ近くに住まいがあったようです。その後、急坂を下り、神楽坂花街の発祥となった行元寺の跡をとどめる寺内公園を横目に、また神楽坂通りへ向かいます。通りの数ある老舗の一つ、文具の相馬屋では店内奥に明治からの古い原稿が展示されていました。店主からは所蔵品について懇切な説明を受けました。この店は日本で初めて原稿用紙を考案したことで知られています。

通りに沿って進み、毘沙門天善國寺へ。境内に入りすぐのところに、一対の狛犬ならぬ狛寅の石像が鎮座してありました。江戸時代のものとのこと。それから後は、横丁めぐり。雨あとの石畳の道をすべらないよう注意しながら進むと、料亭や飲食店などが立ち並び、中には黒塀で囲まれた店もあります。狭い兵

庫横丁には途中、「ホン書き旅館」であった和可葉の佇まいがありました。かつて野坂昭如、山田洋次など作家や映画監督らから愛用された場所、今は閉館したままとなっています。さらに、かくれんぼ横丁、芸者新道を経てもとの神楽坂通りへ。

また通りを下る途中、寄り道をして、泉鏡花・北原白秋の旧居跡へ。周辺一帯には明治以降、多くの文学者、演劇関係者、音楽家などが住み、一帯は文化サロンがつくられていたようです。さらに下った先の飯田橋近くで昼食へ。外堀に面し、喫茶、食事がとれるカナルカフェ。そこからはかつての江戸城牛込見附跡を眺めることができます。その頃には雨はすっかり上がり、折りから濠からの風が店内に吹き渡り涼しさも。そしてしばし歓談。

吟行の後は通信句会になります。四十一名の方から八十二句が寄せられたところでした。言うまでもなく通信句会ですので、当日吟行に行けなくても、参加できます。来年もぜひ奮ってのご参加をお待ち申し上げます。

また投句・選句には余裕を持ってお早めに。

今回ご参加いただいた皆様、ご協力いただいた皆様には心よりの感謝を申し上げます。

（以下敬称略）

山本敏倅会長特選

石畳一枚の梅雨の音

小高沙羅副会長特選

外濠は父内濠は母夏の鴨

今野龍二幹事長特選

あのことは黙っていようねじり花

松澤雅世常任顧問特選

誰彼の隠れ家卯の花腐しかな

松田ひろむ顧問特選

和可菜から見覚えの顔梅雨晴れ間

栗原節子顧問特選

水無月の底は無音の風溜まり

青木栄子監査役特選

簾越しに覗くランチの準備中

《参加作品》

（高点三十句・以下順不同）

1 石畳一枚の梅雨の音

2 くちなしの花街ぬけみち迷いみち

3 まつげサロン浴衣芸妓の午後三時

松澤 雅世

栗原かつ代

青木 栄子

4 誰彼の隠れ家卯の花腐しかな

5 蚊遣り火の匂い白秋旧居跡

6 濠端のカフェに句友といふ涼風

7 一行のあと追いきれぬ梅雨雀

8 数蚊打つ出世稲荷の真正面

9 水無月の底は無音の風溜まり

10 肩幅の兵庫横丁古簾

11 水打って文豪を待つ石畳

12 黒南風に溶けて外濠カフェテラス

13 日暮ては神楽小路の金魚売

14 文豪の筆跡百年青水無月

15 あのことは黙っていようねじり花

16 和可菜から見覚えの顔梅雨晴れ間

17 毘沙門天の槍錆びてよし五月晴

18 紫陽花の白の凭れる昭和の家

19 簾越しに覗くランチの準備中

20 街騒の残響となる梅雨の路地

21 そら豆を挟み今日より赤い箸

22 梅雨寒や神楽小路の昼しづか

23 坂多き食堂にある氷水

24 神木の御幣際だつ緑雨かな

増田 萌子

青木 栄子

石口りんご

長谷川はるか

ダイゴ鉄哉

鈴木 砂紅

西本 明未

石口 榮

小高 沙羅

相沢 幹代

今野 龍二

赤澤 敬子

栗原 節子

小林 和子

松田ひろむ

櫻木美保子

白石みずき

佐藤 道子

北村真貴子

大山実知子

欽守 裕子

青島 迪

25 黒南風や「ホン書き旅館」閉館中

26 カフェカル濠を吹き越す南風

27 紫陽花の誘う横丁生きる人

28 「躡くな！」看板は後の祭りよ夾竹桃

29 うを徳の黒塀鏡花の螢消え

30 さみだれやヒット祈願の絵馬数多

昼灯すネオンの露地や濃紫陽花

料亭の三味音濡らす男梅雨

坂の名に惚ぶ大江戸梅雨の晴

神楽坂風に私をさがす梅雨

野坂昭如ひよっこり横丁梅雨晴間

青水無月インクの文字の褪せぬまま

ゴソという賽銭の音梅雨湿り

貫きし石部金吉花街夏

黒塀の昼の風情の青しぐれ

茶屋有りし露地のかたすみ苔の花

青梅雨や黒塀に松見越したし

山口 紀子

瀬藤 芳郎

（瀬藤芳郎記）

永井 良和

白井 正人

見目 千絵

榎並 恵那

磯部 薫子

川崎 果連

今村たかし

高橋 透水

広田 輝子

山本 敏倅

中内 火星

讃岐 幸江

宮川 夏

山口 昭義

鈴木 光子

山口 紀子

瀬藤 芳郎

（瀬藤芳郎記）

都区協Bブロック吟行会 報告

多摩川台古墳吟行 令和五年七月六日

明け方の雨も上がり、絶好の吟行日和となった。午前十時、多摩川駅に集合。

講師に宮川進先生をお迎えして多摩川古墳を訪ねる吟行が始まった。

古墳展示室を経て、蓬萊山古墳、亀甲山古墳へと進む。川風は心地良いが次第に夏の陽は強くなった。浄水場跡地を利用した人工の池には睡蓮が見頃で夏の虫なども見られた。

句会場のせせらぎ会館は、丘陵の地形に隣接する縁側の様な空間を求めて作られた建物で隈研吾氏の設計である。

講演は引き続き宮川進先生。

「蓬萊山古墳、亀甲山古墳は都内最古の古墳であるので、是非見て頂きたく、その思いが実現出来てよかった。又、この二つの古墳の向きが違えて作つてあるのは、何故か、それは永遠の謎でありロマンである」と熱く語られた。(参加者三十二名)

(広田輝子記)

《特別選者・特選句》

山本敏倅会長特選

たましいは宝萊山の蛇の殻

小高沙羅副会長特選

海からの民の古墳や百合の花

松澤雅世常任顧問特選

黒揚羽ゆらり古墳の時間軸

松田ひろむ顧問特選

古墳群山百合の香の重すぎる

今野龍二幹事長特選

布さらすおとめはいずこ夏の川

長谷川はるか総務部長特選

古墳への供花の鬼百合重きほど

石口 榮会計部長特選

古墳群山百合の香の重すぎる

中内火星広報部長特選

枯るるともジェラシー消えず濃紫陽花

栗原かつ代事業部長特選

鳥騒ぎ深く切れ込む百合の花

瀬藤芳郎企画部長特選

多摩川を見おろす山百合の魔除け

宮川夏組織部長特選

黒揚羽ゆらり古墳の時間軸

磯部薫子研修部長特選

黒揚羽ゆらり古墳の時間軸

榎並恵那通信部長特選

黒揚羽ゆらり古墳の時間軸

宮川進講師特選

海からの民の古墳や百合の花

《参加作品》

1 黒揚羽ゆらり古墳の時間軸

2 緑陰の細道を行く太古まで

3 古墳群山百合の香の重すぎる

4 ありがたく古墳の話とくに蟬

5 入れ替はり立ち替はり緑陰の椅子

6 虚と実の埋まる古墳や木下閣

7 木棺や我なら青き薄衣

8 タワマンをのぞむ古墳や夏の川

9 多摩川をつぶやき一つ滴るる

白石 正人

見目 千絵

栗原かつ代

栗原かつ代

栗原かつ代

櫻木美保子

栗原かつ代

山本 敏倅

赤澤 敬子

小高 沙羅

讃岐 幸江

高橋 透水

青木 栄子

山中 裕子

ダイゴ鉄哉

Aブロック吟行会 〈木場公園周辺〉

令和五年八月八日

《特別選者・特選句》

山本敏倅会長特選

キュビスム的に声も見ゆるや晩夏の蟬

佐怒賀正美

佐怒賀正美副会長特選

暑いぞ木場渡るに辛い橋がある

相沢 幹代

小高沙羅副会長特選

大橋は木場の真ん中秋立ちぬ

高橋 透水

今野龍二幹事長特選

振花や繕りをもじすも風之道

小湊こぎく

松田ひろむ顧問特選

原爆忌スカイツリーは白骨へ

川目 智子

青木栄子監査役特選

公園の輪郭作る蟬しぐれ

山本 敏倅

今村たかし監査役特選

ひまわりがスカイツリーへ背伸びする

川崎 果連

川崎果連Aブロック代表特選

暑いぞ木場渡るに辛い橋がある

相沢 幹代

《参加作品》（高占十句）

1とんぼうは風人は影連れ歩く

石口 榮

2木の家に住み木の下で蟬の声

小高 沙羅

3立秋の雲巻き上げてゆく動悸

栗原かつ代

Aブロックは8月8日、「夏の吟行会」を実施し、44人が参加しました。午前中は都立木場公園を中心に自由吟行。暦のうえでは当日がちょうど立秋であったにもかかわらず、9時には30℃を超えるという過酷なコンディションでしたが、全員が俳人の底力を発揮して奮闘しました。

この公園は24ヘクタール（1ヘクタールは1万平方メートル）もあり、都内で15番目の広さです。（日比谷公園は20位）。

公園は葛西橋通り、仙台堀川によって南・中・北の3地区に分けられており、木場公園大橋が各地区を連絡しています。全長250メートル、主塔の高さ60メートルの斜張橋で、落橋防止対策など最新の土木技術が注がれています。橋の上からは臨場感のある東京スカイツリーを楽しむことができます。

ほかに見どころとしてあげられるのが、日

本で唯一の「帰化植物見本園」。常時200種以上が生育しています。

ひと休みしながら句をまとめるには、木場公園大橋のたもとにある売店が最適。1粒がピンポン玉大という大きな団子「東京やきもち」が評判です。

そんなこんなで汗だくになりながらの吟行のあと、思い思いに昼食をとり、午後からはエアコンのよくきいた『深川江戸資料館』で句会を開催。2句出し5句選で計88句の大接戦を繰り広げました。

句会のなかでは、佐怒賀正美副会長が『現代俳句の拡がり』と題して講演。最近亡くなられた松井国史さんの句集『流寓』（山河叢書33）からいくつかの句を紹介しながら、その魅力を解説するとともに俳句界に残した功績を偲びました。

（川崎果連記）

4 晩夏かなモノクロ地図の木場公園

5 八月の木場八月の江戸惜しむ
6 のどこのおかけめしに扇風機
7 頭蓋骨緩んできたる残暑かな
8 公園の輪郭作る蟬しぐれ
9 木場大橋の太きワイヤー油照
10 段差五センチ立秋に躓いて

(以下順不同)

炎昼の影無き男アトめく
暑いぞ木場渡るに辛い橋がある
秋日和深川めしの江戸明治
炎昼の広場街の音が溶ける
首に巻くマイナス三度の冷タオル
空蟬や力士手形の色となり
誕生日深川めしに西瓜足し
名ばかりの秋の雲置く木場公園
榎櫃の実より青空を広げたり
峰雲や深川めしの天こ盛り
秋日傘どの傾きも巴里の空
沸騰の昼鉄門に青葡萄
秋暑しイベント広場はがらんどろ
お染風邪久松留守の大団扇

赤澤 敬子
川目 智子
瀬藤 芳郎
高橋 透水
山本 敏倅
仲村 初穂
ダイゴ鉄哉
加那屋こあ
相沢 幹代
渡邊すみれ
利光知恵子
讃岐 幸江
水村 洋子
松田ひろむ
広田 輝子
櫻木美保子
上田 みの
宮澤 順子
白石 正人
上野 英一
磯部 薫子

秋立つや江戸六地藏座つてござる
面影の波郷去りゆく蟬の木場
この木なんの木思い出ベンチの緑陰
木場といふ言葉に水と木のほひ
水を刺す木場の大橋大西日
熊蟬やいけしゃあしやあと江戸に伸す
細胞に水ゆきわたる夏木立
大橋の根元張りつく残暑かな
靴脱いで八月の深川めし
振花や繕りをもどすも風の道
原爆忘木場の大橋より叫ぶ
めしならば芭蕉も呼ぼう夏座敷
キュビズム的に声も見ゆるや晩夏の蟬
橋いくつ渡れば見える今朝の秋
夏までと通りすがりに服を買ひ
夏雲の立ち下り下辺にある悪意
水旗横目にまづはあさりめし
ひまわりがスカイツリーへ背伸びする
秋暑し鎖放たるドッグラン
大橋の向こうは知らぬ揚羽蝶
中内 火星
見目 千絵
山口 紀子
山崎 百花
鈴木 光子
米原 暢男
西本 明未
石口りんこ
青木 栄子
小湊こぎく
宮川 夏
今村たかし
佐怒賀正美
今野 龍二
鴨居ひかり
榎並 恵那
横山 小鼓
川崎 果連
大山実知子
長谷川はるか
(長谷川はるか記)

東京都現代俳句協会 Cブロック吟行会のご案内

三鷹・太宰治ゆかりの地を訪ねる文学散歩

開催日時 令和5年11月15日(水)

◎10時30分 JR三鷹駅改札を出て南口集合(当日吟行案内図を配布します)

●句会場 三鷹市市民協働センター第2会議室2階 三鷹市下連雀4-17-23

●駅より会場まで徒歩14分。また三鷹駅南口よりバス → 八幡前下車(徒歩3分)

受付開始:13時20分 ★出句締切:13時50分 囀目2句

開 会:14時00分 ★講話:白石正人氏「太宰治の俳句と文学」

句 会 費:1000円 上位者には賞品があります

懇親会:実施 会場是三鷹駅近く(会費は4000円予定)

★参加申し込みは11月5日まで

●問合せ申し込み先は

高橋透水:TEL:090-3231-0241 acenet@cap.ocn.ne.jp

磯部薫子:TEL:080-3543-7400 happydays777a@yahoo.co.jp

第三十三回高田馬場「夏」句会報

令和五年七月四日（火）

兼題「万緑」・席題「紫」

梅雨晴の清々しい一日でした。今回は27名の方に参加していただき感謝申し上げます。

1紫蘇を揉む男科理のこだはりに

長谷川はるか

2八十二歳万緑へ行ったきり

小高 沙羅

3立ち尿る母万緑につつまるる

ダイゴ哲哉

4万緑や違う地図持つ兄弟

青木 栄子

5万緑の風に委ねる詩人の死

広田 輝子

6万緑や薄紙ほどの片おもい

白石みずき

7生き生きと母が紫蘇もむ厨かな

江原 玲子

（以下順不同）

万緑や味噌つ菌の子がよく笑う

石口 榮

糾へる縄万緑にひつかかる

松澤 雅世

万緑を見下ろしているにぎりめし

山口 紀子

紫の風呼んでをり江戸風鈴

上野 英一

万緑や銃声遠く聞く眩暈

川崎 果連

ドロインの目や万緑の中を行く

坂元 君江

紫の供給断たれ四葩枯る

白石 正人

万緑や抱擁すれば根が生える

高橋 透水

文月の風来て紫の上の嘘

今野 龍二

万緑に分け知り顔を置いてくる

相沢 幹代

鯉の背山紫陽花の陰を抜け

安藤 草太

妻でない名前がぼろり紫木蓮

松田ひろむ

紫の浴衣遠い日の折り襷

見目 千絵

万緑や遠回りして君に会う

宮川 夏

滝壺に吸い込まれゆく万緑よ

磯部 薫子

万緑が迎へる風のあなたたち

山崎 百花

崖を負う紫草の花小さき

赤澤 敬子

万緑や風の屯し無人駅

櫻木美保子

万緑や雨の降るとも降らぬとも

大橋 愛子

万緑や愚子のように一人走る

山本 敏倅

どうぞお元氣でお過ごし下さい。宮川夏記

高田馬場「冬」句会のご案内

日時 令和六年一月九日（火）

午後十二時半受付開始

会場 費 千円

兼題 所 JR高田馬場駅前Fビル8階

兼題 「鯨」

席題は当日揭示

句会内容 二句投句・互選六句内一句特選

参加申込 宮川夏（定員二十八名）

TEL 080-3452-2577

Fax 03-3333-9841

（い）自分の氏名をお書き添えください

編集後記

▼来年から都区協の通信句会は偶数月の「ス克蘭ブル句会」に奇数月の「ビッグバン句会」という二本立てになった。詳細はこの会報に同封のチラシをご覧ください。▼40周年記念俳句大会後、毎月目白押しだった吟行会も余すところCブロックだけになってしまった。▼見方を変えれば、間もなく令和六年ということである。昨年の後記に「それにしても今夏は暑かった」とあった。間違ひなく来年の夏も非常に暑いだろう。温暖化はもう止められないのだろうか。

▼令和六年。都区協は熱くなります。都区協主催で毎年俳句大会が始まります。詳しい内容は次号の会報でお知らせする予定。地球は暑いがそれ以上に熱くなる都区協です。▼巻頭で幹事長が言うように、わたしも齢を気にせず、おらかに恋の歌でも謳って、のほほんと生きていきたいものだ。ただ謳うだけです。（火星）

広報部・編集室

〒150-0013 渋谷区恵比寿

TEL 03-3333-5120 中内火星方

TEL FAX 03-3333-4014 四四七九

Eメール ham@mx3.ttcn.ne.jp